

『三玉挑事抄』注釈 雑部（四）

岩 坪 健

本稿は『三玉挑事抄』雑部665～707番を掲載する。凡例は雑部（二）（同志社大学「人文学」第一九二号所収）と同じであるので省略する。担当者はすべて本学博士課程在学者で、以下の通りである。なお各項目末尾の（ ）内には、担当者の氏名を示した。

森あかね、村上泰規、島田薫、松本匡由、金子将大、小森一輝、北井達也、松田望、八木智生、橋谷真広、嶋中佳輝、丹羽雄一、溝口利奈、湯本美紀

665人かたの物いふはかりつくりけんひたたくみをも尋ねやはせぬ

寄生卷云、むかしおほゆる人かたをもつくり、絵にもかきとめておこなひ侍らんとなん云々。

列子。湯問篇曰、周穆王西巡狩、越崑崙、不至弇山反還。未及中国、道有献工人。名偃師云云。偃師謁見王。王薦之曰、「若与偕来者何人」。对曰、「臣所造能倡者」。穆王驚視之、趣步俯仰、信人也。巧夫、鎮其頤則歌合律、捧其手則舞应節、千变万化、唯意所適

云云。

〔出典〕雪玉集、六一一九番。源氏物語、宿木、四四八頁。列子、二四八、二四九頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。『列子處齋口義』〔臣所造―臣之所造〕。

〔訳〕 (哀傷歌の中)

人形がしゃべるほど (精巧) に造ったという、飛驒の匠を尋ねずにはいられようか。

宿木の巻によると、昔をしのぶ像も作り、絵にも (その姿を) 書き留めて仏道修行をいたしましよと云々。

列子。湯問篇によると、周の穆王が西へお出かけになったとき、崑崙の山は越えたが、弇山には行かずに引き返した。まだ中国には着かないとき、途中で細工師を献上したいという国があった。(その細工師の) 名は偃師といった云々。偃師は王に謁見した。王は偃師をそばへ進ませて言った。「お前と一緒にやって来た者は、何者か」。偃師は答えて言った。「私が作った役者でございます」。穆王が驚いてこれを見たところ、小走りに歩くさま、下を向いたり上を向いたりするさまは、ほんとうに人間そのものであった。それのなんと巧みであることか、(細工師が) そのあごを動かすと、歌を歌って旋律も合っていた。(細工師が) その手を上げると、舞を舞って節に合っていた。ありとあらゆる所作が、(穆王の) 思いにかなった云々。

〔考察〕『源氏物語』は、中の君のもとを訪れた薫が亡き大君 (中の君の姉) を偲ぶ言葉。当歌の第四句「飛驒匠」は、律令において飛驒国 (岐阜県北部) から徴発された大工。和歌や説話の世界では名工の代名詞で、『今昔物語集』卷二四第五話に登場する伝説上の工匠に由来する。当歌は飛驒の匠を尋ねて、故人の像を造形したい気持ちを詠む。

〔参考〕『列子虞齋口義』は寛永四年（一六二七）版（国会図書館デジタルコレクション）を使用。

（小森一輝）

666 霧にむせぶ春のうくひす立わかれ山ほと、きす音のみなくらん

元稹。咽^レ霧ニ山鶯^ハ啼^{コト}尚^{マレナリ}少。

〔出典〕雪玉集、六一一四番。和漢朗詠集、上、春、鶯、六五番。

〔異同〕『新編国歌大観』「霧にむせぶ―霧にむすぶ」。『和漢朗詠集註』ナシ。

〔訳〕（哀傷歌の中）

霧の中でむせび鳴く春の鶯（のように故人）は別れて行き、（死出の山から来るといふ）山ほととぎすの声だけが響いているのだろう。

元稹。朝霧の中でかすかに山の鶯がさえずるのは、いっそう珍しい。

〔考察〕当歌は元稹の詩を踏まえ、晩春に鳴き声稀になる鶯と入れ代わり、夏に鳴き始める山ほととぎすは死後の世界と関わり、故人との別れのつらさを詠む。『和漢朗詠集註』には「春残テ鶯ノ声ナヲモノウシ。故ニ啼^{コト}尚^{マレ}少^レト云也。咽^レ霧ニトハ朝霧ノウチニ、コエノカスカナル意也。」とあり、鶯の鳴き声が珍しくなるのは、春が残り少なくなると、鶯は鳴く気が進まないからだと解釈する。「ほととぎす」は夏を告げる鳥で、その声は恋心や懐古の情を呼び起こすとされる。当歌では「死出^{シデ}の田長^{タカサ}」という異名から冥土と現世を往復する鳥として詠まれている。

〔参考〕「山ふかみ立ちくる霧にむすればや鳴く鶯の声のまれなる」（千里集、一番、咽霧山鶯啼尚少）。

（松本匡由）

667 またみすやならふる翹かはす枝た、あらましくちしことのは

長恨歌、見于恋部。

〔出典〕雪玉集、六一―三番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 (哀傷歌の中)

二度と見ることはないなあ。(「比翼の鳥」のように) 翼を並べ、(「連理の枝」のように) 枝を交わし(という誓い)の言葉は、(相手が亡くなると) 朽ちてしまい、もう(叶わぬ) 願望になってしまったなあ。

長恨歌は恋の部に見える。(恋部345番歌、参照)。

〔考察〕『長恨歌』の「比翼の鳥」「連理の枝」の内容を踏まえ、恋人を亡くしたはかなさを詠む。

(松本匡由)

668 たのもしな此世つきてもはかりなき命ある国にうつる行末

分別功德品。爾時大会聞_三仏_ノ説_レ壽命却_レ數長遠如_レ此、無_レ量無_レ辺阿_ノ僧祇_ノ衆_ノ生得_二大_二饒_二益_一。

〔出典〕雪玉集、六三―八四番。妙法蓮華經、卷五、分別功德品、第一七。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『妙法蓮華經』「此―是」。

〔訳〕 (哀傷歌の中)

頼りに思われるなあ。この世の命が尽きても、際限の無い命がある国に移り住む未来は。

分別功德品。そのとき説法の会場で仏が、「壽命の年数が果てしなく続くさまは、このようである」と説いたのを聞いた、測ることも数えることもできないほど無数の人々は、大きな益を得た。

〔考察〕 出典は、釈迦が久遠実成（はるか昔に仏になったこと）の如来であることが証明された結果、それを信じて妙法蓮華經を受持、読誦、解説する者の功德を説いたもの。当歌はその内容を踏まえ、極楽往生を信じて故人を弔う。

（松本匡由）

無常

669 しろしとてきさめる石もあたしの、その名をわかぬ草の陰かな

白居易。古墳何世人―。

〔出典〕 雪玉集、七二四七番。白氏文集、卷二、諷諭、続古詩十首。

〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。『白氏文集』「古墳何世人―古墓何代人」。

〔訳〕 無常

目印として（死者の名を）刻んだ、あだし野の墓石もはかなくなり、その名前も分からなくなり、誰も（訪れず）踏み分けない草の影だなあ。

白居易。古い墓はいつの世の人のものなのか（分からない）。

〔考察〕 出典本文の「―」は省略を意味し、「不知姓与名、化作路傍土、年年春草生、感彼忽自悟、今我何营营」と続き、名利に奔走している我が身を疎ましく思う厭世観と無常を歌う。「あだし野」は京都市右京区、嵯峨の奥にある野で火葬場があり、世の無常を感じさせる地名として詠まれる。地名の「あだしの」に、はかない意の「あだ」を掛ける。当歌の第四句「わかぬ」の「分く」には「判別する」と「人が踏み分ける」の意を掛ける。

〔参考〕「あだし野の露きゆる時なく、」(徒然草、七段)。

(村上泰規)

雑歌中

670 折ふしの花折ちらしあかむすふたよりもあれや山の下庵

賢木巻云、あか奉るとて、からく〜とならしつゝ、菊の花、こさうすき紅葉など折ちらしたるも、はかなけれど云々。

〔出典〕雪玉集、四四四四番。源氏物語、賢木巻、一一七頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 雑歌の中

季節の花を折り散らして、閑伽あか(仏前に供える清水)を汲むよすがもあるのだろうか、山中の庵には。

賢木の巻によると、(法師たちが)閑伽をお供えしようとして、からからと花皿の音を鳴らしては、菊の花や濃い薄い紅葉などを折り散らしている有様も、格別の風情ではないが云々。

〔考察〕『源氏物語』は、光源氏が藤壺を思う気持ちを抑えて雲林院に参籠し、法師たちに経文の義を夜通し議論させた明け方の場面。

〔参考〕「山の下庵したいは」の用例は、和歌では十五世紀から見られる。

(村上泰規)

釈迦

671世の中に只われひとりたふとしとのへしことはの末もたふとし

禪蒙求、普曜經。世尊降生^{シテ}、一手指^レ天、一手指^レ地、周行七步。目顧^ニ四方^ニ云、「天上天下唯我独尊」。

〔出典〕雪玉集、四〇五一番。禪苑蒙求、卷之上、釈迦七步。

〔異同〕『新編国歌大観』「たふとしと」とばかりを」。『禪苑蒙求』ナシ。

〔訳〕 釈迦

（仏が）「この世界にただ唯一、私一人が尊い」と述べたその言葉は、後の世でも尊い。

禪苑蒙求、普曜經。釈尊はこの世に降誕して、一方の手で天を指差し、もう一方の手で地を指差しして、東西南北を七歩ずつ歩き、四方を顧みて、「天上天下、唯我独尊」と言った。

〔考察〕「禪蒙求」は正大二年（一二二五）に成立した、金の錯庵志明撰の禪宗事典『禪苑蒙求』。初學者のために禪宗の公案を、李瀚の『蒙求』に倣い四字対句の韻語により分類。引用箇所は上巻の冒頭で、以下、「和補曰、普曜經云、仏初生利利王家、放大智光明、照十方界地、湧金蓮華、自捧双足、東西及南北、各行於七步分手指天地、作師子吼声上下及四維、能尊我者。」と続く。「天上天下唯我独尊」は当歌のように「天地の間で私が一番尊い」と解釈するほか、「この世で私たち一人一人の人間が一番尊い」と見る説もある。当歌の下の句にある「ことばの末」の意味は「ちよっとした言葉」ではなく、「釈迦が言葉を発したその末の世」と理解した。

〔参考〕『禪苑蒙求』は寛永十六年（一六三九）版を使用。

得弁才知

（村上泰規）

672たのめとの法に心をそめ紙のかりのさとりもかりの色かは

延喜式。忌詞、内七言、仏称ニ中子ヲ經ヲ称ニ染紙ト。

〔出典〕雪玉集、五四三〇番。延喜式、卷五、神祇五、忌詞。

〔異同〕『新編国歌大観』「得弁才知—得弁才智」。『延喜式』ナシ。

〔訳〕 弁才知を得る

(法蔵菩薩が) 頼りにしなさいという仏法や經典に心を深く寄せたならば、かりそめの悟りもかりそめの思いであろうか。(いや、法蔵菩薩の四十八願を頼めば、悟りは開ける。)

延喜式。忌詞で内の七言は、仏を中子なかこと称し、經きやうを染紙ぞめがみと称す。

〔考察〕出典は齋宮における忌詞を説明した箇所、仏教用語の内七言(仏・經・塔など)と不吉な言葉の外七言(死・病・哭など)がある。当歌は「心をそめ紙」に「心を染め」と「染め紙」(經典の言い換え)を重ねる。

〔参考〕歌題の「得弁才知」は『無量寿經』で説かれる、法蔵菩薩(後の阿弥陀仏)が衆生を救うために立てた「四十八願」(四十八種の誓願)の内の第二十九願「得弁才智の願」。その願は「設我得仏、國中菩薩、若受説經法、諷誦持説、而不得弁才智慧者、不取正覚。」で、國中の菩薩が「弁才智慧」(仏の智慧を理解し伝える力)を得なければ、自分(法蔵菩薩)は正覚(正しい悟り)を開かない、という内容。

釈教

673人の世のちとせをまたぬことほりや鶴の林の春にみせけん

(島田薫)

涅槃經曰、爾時世尊娑羅林ノ下ニ寢ニ卧宝牀ニ云云。入ニ涅槃ニ已。其ノ娑羅林東西ノ二双合^テ為^ニ一樹^一。南北ニ二双合^テ為^ニ一樹^一ニ垂^ニ覆宝牀ニ盖^ニ覆如来^ヲ。其ノ樹即時ニ慘然^{トシテ}變^レ白^ニ猶如^ニ白鶴^一。

〔出典〕雪玉集、二七四七番。大般涅槃經後分、卷上、忉利還源品、第二。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『大般涅槃經後分』「卧宝牀―臥宝床」「覆宝牀―覆宝床」「覆如来―於如来」。

〔訳〕 釈教

人の世は千年もの長い年月を待たないという道理は、釈尊入滅を悼んで林の木々が鶴の羽のように白くなったという、その春に（釈尊が）見せたのだろうか。

涅槃經によると、そのとき釈尊は娑羅林の下に臥して宝床に寝た云々。（釈尊は）涅槃に入り亡くなった。その娑羅林の東西の二本の樹は合わさって一本の樹となった。南北の二本の樹も合わさって一本の樹となり、釈尊の伏した床に垂れ下がって釈尊を覆った。その樹はすぐに無惨にも白く枯れてしまい、まるで白い鶴のようであった。

〔考察〕『大般涅槃經後分』二巻は釈迦の入滅を中心に記述する。釈迦入滅の際に木々が鶴の羽のように白くなったことを当歌は踏まえて、人の世の無常を詠む。当歌の「鶴の林」はその故事に由来する。

（島田薫）

674霜ふれは音するかねにをのつからなき眠も限りやはなき

山海経。豊山之鐘一。

〔出典〕雪玉集、二四八六番。円機活法、卷二、天文門、霜。

〔異同〕『新編国歌大観』『円機活法』ナシ。

〔訳〕 (釈教)

霜が降るとひとりでに鳴るといふ豊山の鐘のように、長い眠りに就いていてもひとりでに目が覚めることはないのだろうか。

山海経。豊山の鐘は―。

〔考察〕『山海経』は中国の地理書。ただし『山海経』の本文は「豊山有九鐘焉。是知霜鳴」(270番歌に引用)で異なる。出典は『円機活法』「豊鐘鳴ル」の解説「山海経。豊山之鐘、霜降_テ而_ツ自鳴_ル」によると考えられる。豊山の鐘は霜が降るとひとりでに鳴るといふ意で、自然界に生じた現象に対応して、ある現象が起こされることをいう。当歌の「ながき眠り」とは長眠(長夜の眠り)を指し、煩惱のため長く輪廻の迷いから覚めないことの比喩。当歌はひとりでに鳴る豊山の鐘に対して、何もせずひとりでに長眠から目覚めることはないが、悟る自覚を持てば長眠にも「限り」があり目覚めると詠む。

〔参考〕『新編国歌大観』の歌肩に「永正十三十二御月次」とあり、当歌は永正十三年(一五一六)十二月の月次歌。

(松田望)

675たのめなをこゝろの水は濁るとも子をおもふ魚の道は絶しな

大論。七十九日、菩薩不_レ為_三諸仏_一所_モ念者、則善根朽壞。如_下魚子不_レ為_レ母念_一則爛壞不_レ生。

〔出典〕雪玉集、七四六五番。大智度論、卷七九。

〔異同〕『新編国歌大観』『大智度論』ナシ。

〔訳〕 (釈教)

なおも頼りにしなさい。水が濁っても、魚の子を思う(母の)道は絶えないように、心が濁っても、子を思う(母の)道は絶えないなあ。

大智度論の卷七十九によると、菩薩が諸仏のために祈らなければ、善根は朽ちて壊れる。魚の子が母のために祈らなければ、その身が腐り崩れて生きられないように。

〔考察〕『大智度論』は、他者のために祈り続けることの重要性を説く。本文中の「善根」とは諸善を生み出す根本となるもの、また、善い果報を招くと思われる善の業因をいう。当歌は心が濁っても、なお子を思うことができ、成仏の道は閉ざされないことを詠む。

〔参考〕『大智度論』は大乗仏教の論書、一〇〇巻。龍樹著と言われる。大論、智論などと略称する。出典の文章では孝子が母のために祈るのに対して、当歌では子を思うで異なる。当歌に合う資料としては『観無量寿経』(676・694番歌、参照)の注釈書で唐代の僧元照が撰述したとされる『観無量寿仏経義疎』に、「智論云、例如魚子母若不念子則爛壞。」とある。また、法然著『選択本願念仏集』の注釈書で、鎌倉時代の僧良忠の著とされる『選択伝弘決疑鈔』[寛永九年(一六三二)版]にも、「大論云、例^ヘ如^シ魚子ノ母若不^レ念^レ子^ヲ即^レ壞爛^ガ。」とある。当歌は『大智度論』そのものよりも、注釈書に引かれた『大智度論』によって詠まれたと推測される。

寄鏡釈教

676かの国とおもへはこゝを遠くしてさらぬ鏡にむかふはかりそ

双観経。阿弥陀仏、去此不遠云云。

〔出典〕雪玉集、二八四六番。観無量寿経。〔異同〕『新編国歌大観』『観無量寿経』ナシ。

〔訳〕鏡に寄せる釈教

(阿弥陀仏が)あの国(極楽浄土)にいると思うと、(阿弥陀仏は)ここから遠くに去ったわけではなく、いつもそばにある鏡に向かうほどであるなあ。

双観経。阿弥陀仏はここから遠くないところへ去る云々。

〔考察〕「双観経」は『無量寿経』と「観無量寿経」を指し、『阿弥陀経』とともに浄土三部経と総称する。『勸無量寿経』は釈迦が阿弥陀仏とその浄土などを観想する方法を説き、引用文は身近なところに浄土があり、阿弥陀仏はすぐそばにいることを述べる。当歌はそれを踏まえて阿弥陀仏が「ここを遠くして去らぬ」に、「ここを遠くして去らぬ鏡」(そばを離れない鏡)を重ねる。

(金子将大)

信解品

677^碧まよひ来し身は雲水の跡とめて立かへり見る故郷の月

〔出典〕碧玉集、一二〇四番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕信解品

迷って来た身は行く先が定まらないが、その足跡を止めて、戻って見る故郷の月だなあ。

〔考察〕出典は678番歌、参照。長年、諸国を流浪していた男が帰郷した話を踏まえる。当歌の「雲水」は雲や水くもみづのよ

うにゆくえの定まらないもの譬え、「月」は悟りの象徴で、「月」を「見る」とは改心を意味するか。

〔参考〕『新編国歌大観』は歌肩に「五月十一日故竜安寺卅三廻とて右京太夫政元すすめ侍る」とある。「竜安寺」は龍安寺を建立した細川勝元（生没一四三〇〜七三年）の法名。「政元」は応仁の乱で戦火にあつた龍安寺を再興した細川政元（生没一四六六〜一五〇七年）で、勝元の子。当歌は勝元の三十三回忌、一五〇五年の詠作。

（金子将大）

678 たらちねの心はさらに闇ならて見し世の道やけふもたとらぬ

譬若有_レ人、年既幼稚_{ニシテ}捨_レ父逃_レ逝_テ、久住_{ニシテ}他_ニ国_ニ。或_ハ十、二十_{ヨリ}至_ニ五十_歳。年既長大_{ニシテ}、加_ハ復_ハ窮_ノ困_、馳_ニ騁_ニ四方_ニ以_テ求_ニ衣食_ヲ、漸_々遊_ニ行_{ニシテ}、遇_ニ向_ニ本_ニ国_ニ。其_ノ父_ノ先_{ヨリ}来_カタ、求_レ子_{不_レ得}云云。時貧窮_ノ子、遊_ニ諸_ノ聚_落、經_ニ歴_ニ国_ニ邑_ニ、遂_ニ到_ニ其_ノ父_ノ所_レ止_ニ之_ニ城_ニ。父_毎念_レ子_ヲ。与_レ子_離別_{五十}余年。

〔出典〕雪玉集、二五〇一番。妙法蓮華經、卷二、信解品、第四。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『妙法蓮華經』「父每―父母」。

〔訳〕（信解品）

親の心は決して平静を失わず、（子と）暮らしていた故郷の道を今日も尋ね捜さないことがあろうか。

たとえばある人がいて、まだ若い時に父を捨てて逃げ出し、長い間、他の国に住んでいて、十年、二十年、そして五十年に至った。年は既に大人になって、困難や貧乏でますます苦しみ、四方に奔走して衣服や食べ物を探し求め、あちこち放浪して、たまたま生まれた国に向かった。その父は以前より子供を探し求めたが見つからなかつた云々。そのとき貧窮した子は、あちこちの集落を放浪し、国や領地をめぐる歩き、ついにその父の留ま

る町にたどり着いた。父はいつも子を思っていた。子と離別して五十年余り(も過ぎた)。

〔考察〕出典は、父親が失踪した子を思い続けるさまを描いた部分。当歌の「心の闇」は親が子を思うあまりに、思慮・分別がつかなくなることのたとえ。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」(後撰和歌集、雑一、一一〇二番、兼輔朝臣)。

(金子将大)

葉草喩品

679 ^碧花に咲実にはあらはる、草も木もかれぬ恵みを雨にこそしれ

〔出典〕碧玉集、一一〇五番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 葉草喩品

花が咲いたり実が実ったりする草も木も、枯れることのない慈悲の恵みを雨(のおかげ)だと知っているなあ。

〔考察〕出典は682番歌と同じで、雨は仏の教え、草木は衆生の例え。「花に咲き実にはあらはるる」とは、草木が雨のおかげで花を咲かせ実を結ぶように、人も仏の教化を受ければ誰でも等しく成仏できるという意味。

〔参考〕『新編国歌大観』は歌肩に「小倉中納言実右卿卅三回に一品経すすめ侍る」とあり、当歌は小倉実右の三十三回忌(一五〇二年)の詠作。

(北井達也)

680 ふる雨の色やはそれと実をむすひ花をひらくもをのか姿を

〔出典〕雪玉集、二五〇二番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 (葉草喩品)

降る雨の種類によるのであろうか(いや、雨はみな同じだ)。草木が花を開き実を結ぶのも、草木自身の性質によるのだなあ。

〔考察〕 出典は682番歌と同じで、同じ雨でも雨水を受ける草木の育ち方は種々あるように、仏陀の教えは同じでも衆生の受け取り方はさまざまである、と説く。当歌もそれを踏まえて、同じ雨を浴びても花が咲いたり咲かなかつたり、また実が結んだり結ばなかつたりするのは、草木自身の性質によると詠む。

〔参考〕 『新編国歌大観』は歌肩に「続撰八文亀二十廿二」とあり、当歌は『続撰吟集』巻八・三二二八番歌、文亀二年(一五〇二)十二月二十二日の詠作。『続撰吟集』は千艘秋男氏編、古典文庫・第五八五冊、一九九五年による。

(北井達也)

681ふるまゝに色ます峰の木の葉とて雨やはかはる谷の陰草

〔出典〕 雪玉集、二五〇三番。〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 (葉草喩品)

雨が降るにつれて、峰の木の葉の色を増すからといって、谷陰の(まだ黄葉していない)草に降る雨と(峰に降る雨とは)違うだろうか(いや、いずれも同じ雨だ)。

〔考察〕 出典は682番歌と同じで、雨は仏の教え、草木は衆生の喩え。当歌はどこに生える草木であろうと、雨は平等に降り注ぎ葉の色を濃くさせるように、仏は誰に対しても平等に教えを示すと詠む。

〔参考〕『新編国歌大観』は歌肩に「十月五日妙華寺関白卅三廻」とあり、当歌は一条教房の三十三回忌にあたる一五
一二十年十月五日の詠作。

(北井達也)

682末の露おなし恵みそ大あらしの杜の小草の本のしつুকも

譬如、三千大千世界ノ山川谿谷土地ニ、所レ生草木叢林及諸葉草、種類若干、名色各異ナリ。密雲弥布シテ編覆ニ
三千大千世界ニ、一時等ク澍ク。其沢普洽草木叢林及諸葉草、小根小茎小枝小葉、中根中茎中枝中葉、大根大茎
大枝大葉諸樹ニ。大小随ニ上中下ニ各有レ所受。一ニ雲ノ所レ雨称ニ其種性ニ而得ニ生ニ長ヲ。

〔出典〕雪玉集、二五〇四番。妙法蓮華經、卷三、葉草喻品、第五。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『妙法蓮華經』「編一遍」。

〔訳〕(葉草喻品)

葉の末にある露は、(ほかの草木と)同じ雨の恵によるものだ。大荒木の森に生える小草の根元の雫も(同じ恵み
の雨だ)。

譬えていえば、三千大千世界において、山川、溪谷、土地に生える草木、密林および多くの葉草は、たくさん
の種類があり、名称と形態はそれぞれ異なっている。そこに、厚く重なった雲が一面に立ちこめ、あまねく広
く三千大千世界を覆い、一時に等しく雨を注ぐ。その雨の潤いはあまねく草木、密林および多くの葉草に注
ぎ、それらの小さい根、小さい茎、小さい枝、小さい葉と、中ぐらいの根、中ぐらいの茎、中ぐらいの枝、中
ぐらいの葉と、大きい根、大きい茎、大きい枝、大きい葉と多くの樹を潤す。これらの植物は大と小によつ

て、また上、中、下にしたがってそれぞれ雨から受けとる水の量が決まっている。このようにして、一つの雲が降らした同じ雨によって、植物はその性質に応じて生長する。

〔考察〕 出典は三草二木の喩え。上草・中草・下草と大樹・小樹が等しく慈雨の恵みを受けるように、資質の異なる衆生が等しく仏の教えを受けて悟りを開くこと、また、衆生の素質やその受けとめ方がそれぞれに異なることの喩え。当歌は、どのような草木でも雨が遍く恵みを与えるという出典の内容を踏まえ、葉の末にある露も根元にある雫も同じ雨の恵みによるものだと詠む。「末の露」「もとの雫」は、遅速はあっても結局は消えてしまうものだから、人の寿命に長短はあっても死ぬのには変わりはないことを意味する。「末の露もとのしづくや世の中の遅れ先立つためしなるらむ」（和漢朗詠集、下、無常、七九七番、良僧正）。

〔参考〕 「三草二木」は法華七喩の一つ。法華七喩とは法華経に説かれる七つの比喩で、火宅喩（譬喩品）・窮子喩（信解品）・葉草喩（葉草喩品）・化城喩（化城喩品）・衣珠喩（五百弟子授記品）・髻珠喩（安樂行品）・医子喩（寿命品）である。「三千大千世界」とは、古代インドの世界観による全宇宙。須弥山を中心とする一世界を千集めたものを小千世界といい、それを千集めたものを中千世界、さらにそれを千集めたものを大千世界という。合計、三千の世界から成るので三千大世界、略して三千世界、三千界ともいう。「大荒木の森」は歌枕で、「大荒木の森の下草古いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」（古今和歌集、雑上、八九二番、詠み人知らず）のように、草が生い茂っている様子を詠む例が多い。『新編国歌大観』は歌肩に「続撰八享祿三十二五 理覚院勧進」とあり、当歌は『続撰吟集』巻八・三一五四番歌、理覚院の勧進による享祿三年（一五三〇）十二月五日の詠作。

（北井達也）

授記品

683 ^碧あつき日もしらぬ木陰の涼しさは露よりみゆる夕ぐれ空

如下以_二甘露_一灑_{クニ}除_レ熱_ヲ得_甲清涼_上云々。

〔出典〕碧玉集、一二〇六番。妙法蓮華經、卷三、授記品、第六。

〔異同〕『新編国歌大観』『妙法蓮華經』ナシ。

〔訳〕 授記品

暑い日も(暑さを)感じない木陰の涼しさは、露(が降り注ぐこと)によって見える(涼しい)夕暮れの空(のよ
うだなあ)。

(成仏の約束をしてくださいれば) あたかも甘露の法雨がそそがれて、熱惱が取り除かれ、心身が清涼となるよ
うだ云々。

〔考察〕当歌の「露」は夕立によるものと、仏教語の「甘露」(不死の靈液)を意味する。出典は授記(仏が弟子の成
仏を予言すること)を得ることを、甘露を得ることにたとえたもの。

〔参考〕出典は四人の阿羅漢(須菩提・迦梅延・摩訶迦葉・目連)が、釈尊より未来の成仏を約束されるという内容。
『新編国歌大観』の歌題に「授記品 行季朝臣すすめ侍るに」とあり、世尊寺行季に勧められた詠作。

(小森一輝)

勸発品

684 あひかたき法の中にもうへもなき名残つきせぬけふのかへるさ

仏説是ノ經ニ時、普賢等ノ諸菩薩、舍利弗等ノ諸声聞、及諸天龍人非人等、一切大会皆大ニ歡喜シ、受ニ持仏語ヲ、作レ礼而去ル。

〔出典〕雪玉集、二五〇六番。妙法蓮華經、卷八、普賢菩薩勸發品、第二十八。

〔異同〕『新編国歌大観』『妙法蓮華經』ナシ。

〔訳〕勸發品

出会いがたい仏法の中でも、この上もない仏法に出会い、この上もなく名残が尽きない、今日の帰り道だなあ。

釈尊がこの経をお説きになったとき、普賢ら諸々の菩薩、舍利弗ら諸々の声聞、および天・龍・人・非人に至るまで、集まったものは皆、大いに歡喜し、釈尊のお言葉を受けとめ、礼拝して去った。

〔考察〕勸發品は『法華經』の終章にあたり、出典は最後の一文。当歌は法会の感動の余韻を詠む。第三句「上も無き」は、その前と後を修飾する。

〔参考〕「舍利弗」は釈迦の十大弟子の一人。「声聞」は仏の説法を聞いて悟る人。「非人」は悪鬼や夜叉など人間のよくな姿をしたもの。

(小森一輝)

人記品

685うへ置したねや昔の春の花いまをそくときいろにつくとも

而告之曰、「諸善男子、我与阿難等於空王仏所同時発阿耨多羅三藐三菩提心。阿難、常ニ樂ニ多聞ヲ我常勤テ精進シキ。是故我已得レ成阿耨多羅三藐三菩提」。阿難護持我法亦護将来諸仏法蔵教化成就諸菩薩衆。其

本願如_レ是_一」。

〔出典〕碧玉集、一二二一番。妙法蓮華經、卷四、授学無学人記品、第九。

〔異同〕『新編国歌大観』「人記品―人記品 人の追善とてすすめ侍るに」「いろにつくとも―色に咲くとも」。『妙法蓮華經』「阿難護―而阿難護」。

〔訳〕 人記品

昔、植えておいた種が春になり、花が今になって遅く色づいて咲いても、早く色づいて咲いても（咲くことに変わりはないように）、悟りを得るまで遅くても早くても変わりはない）。

（釈迦は菩薩たちに）こう仰った。「みなさん。私はかつて阿難と一緒に、空王のみもとにおいて、仏の悟りを求める誓願を起こした。阿難はいつも多くの教えを聞くことに専念したのに対して、私はもっぱら精進に専念した。その結果、私はすみやかに悟りを得たのに対して、阿難は私の教えを正しく保持し、また未来世において出現する多くの如来たちの教えを正しく保持し、菩薩たちを教化して悟りへ導くことになった。これこそ、この阿難の本願なのだ」。

〔考察〕「授学無学人記品」の主題は授記（仏が弟子たちに、未来において仏の悟りを得ると予言すること）で、授記される対象は、阿難と羅睺羅をはじめ二十人の声聞たちである。阿難が授記された時、新米の菩薩たち八千人が、偉大な菩薩に先んじて、声聞に過ぎない阿難が授記されたことに疑問を抱いた。その心中を察した釈迦が過去世からの因縁を明らかにして、阿難が授記された理由を説明し、阿難が未来世において悟りを得て如来になるという内容を当歌は踏まえ、悟りを開くのに遅速はあっても、悟りを得る価値に変わりはないことを、花に例えて詠む。第

四句の「とき」は形容詞「疾とき」。

〔参考〕「空王」は空くうの教えを説く人の意から、仏をいう。「阿耨多羅三藐三菩提」は最高の理想的な悟りの意で、仏の悟りを指す。

(松本匡由)

寿量品

686 おろかにそおやのまもりとと、めをく薬をしらて身をうれへける

「我等愚癡誤服ニ毒藥一。願見ニ治療一更賜ニ壽命一」。父見ニ子等ノ苦惱ヲ如レ是、依ニ諸經ノ方ニ求ニ好藥草色香美味一皆悉具足一。擣篩和合シテ与レ子令服。而作ニ此言一、「此大良藥ハ色香美味皆悉具足。汝等可服。速除ニ苦惱一無復衆患」。其諸子中不レ失レ心者、見ニ此良藥色香俱好一即便服レ之ヲ病尽ク除愈。

〔出典〕雪玉集、二五〇七番。妙法蓮華經、卷五、如来寿量品、第一六。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『妙法蓮華經』「此言―是言」。

〔訳〕 寿量品

愚かなことに、親が(子どもの)守りとして残しておいた薬だと知らずに、(子どもは回復しない)わが身を嘆いたことだなあ。

「私たちは智慧がないので、誤って毒薬を飲んでしまった。お願いですから治療していただき、命を助けてください」。父親は子供たちがひどく悶え苦しむ様子を見て、様々な医薬書を参考に、色も香も味もすべて優れた薬草を手に入れ、石臼ですりつぶして、子供たちに服用させようとした。そして、こう言った。「この非常

によく効く薬は、色も香も味も、みな優れている。だから、すぐ服用しなさい。たちどころに苦しみを取り除き、症状を改善するよ」。子供たちの中で、まだ冷静で正常な精神状態を保った者は、与えられた薬が色も香りも優れているのを理解して、すぐに服用したところ、病気は完全に治った。

〔考察〕 出典の文章に続く、「毒に侵され精神状態が尋常ではなくなった子供たちは、名医の父親が手に入れた薬草を良くないものと思いきみ、服用しようとしなかった」という内容を当歌は踏まえ、親の加護に気がつかない不孝な子を詠む。

〔参考〕 「如来寿量品」の主題は釈迦の寿命。釈迦は永遠の寿命の持ち主であるが、それを明らかにすると、いつでも指導してもらえぬから今すぐ修行しなくてもよい、と凡人は考えてしまうので、八十歳で亡くなったことにしたと説く。いわゆる嘘も方便で、出典の「良医治子」も父親が死んだと嘘をつく、子どもたちは悲嘆にくれるうちに正常な精神状態に戻ったという、たとえ話。

(松本匡由)

分別功德品

687 いにしへの命の程をことのはにのへしほとけのけふのたふとさ

要文註于哀傷歌。

〔出典〕 雪玉集、二五〇八番。妙法蓮華経、巻第五、分別功德品、第一七。

〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 分別功德品

かつて命の程度（永遠の命）を言葉に述べた仏の（教えが）今日（まで続くこと）の尊さよ。

必要な文章は哀傷歌に注した。（668番歌、参照）

〔考察〕 釈迦が自分の命は無限大であることを聴衆に語ったことを、当歌は踏まえて詠む。

〔参考〕 『新編国歌大観』の歌肩には「統撰八文明十六九二」とあり、当歌は『統撰吟集』巻八・三二〇八番歌、文明十六年（一四八四）九月二日の詠作。

（松本匡由）

法師功德品

688 たらちねもうれしとしれな黒かみのおもふすちなる法にあふとは

以^レ要^ヲ言^ハ、之^ヲ、三千大千世界中一切内外^ニ所^レ有^諸声雖^レ未^レ得^三天耳^ヲ以^ニ父母所生清淨^ノ常耳^ヲ皆悉聞^知ン。

〔出典〕 雪玉集、二五〇九番。妙法蓮華経、卷六、法師功德品、第一九。

〔異同〕 『新編国歌大観』「あふとは―逢ふみは」。『妙法蓮華経』ナシ。

〔訳〕 法師功德品

親も（子の出家を）嬉しいと知ってほしい。黒髪が、願いどおりに法華経に出会っ（て剃髪し）たとは。

要するに、三千大千世界の内外で発せられるありとあらゆる声を、まだ天耳（世界中の声を聞ける天人の耳）を持つていなくても、父母から授かり（法華経の功德で）清められた耳のおかげで、すべて悉く聞き知ることができらるだろう。

〔考察〕 出典の「天耳^{てんじ}」は色界の諸天人の耳を指し、六道衆生の言語と一切の音響を聞きとれる。「常耳^{じょうじ}」は生まれ

た時のままの耳。天耳を備えていない人間でも、父母から授かった常耳が法華經の功德で清められれば、無数の種類の音が聞き取れると説く。当歌の第二句「知れ」は「知る」の命令形。子が法師になれば親の成仏は約束されるので、嘆き悲しまず祝福してほしいと詠む。「筋」は「髪」の縁語。「たらちね」と「黒髪」を詠み合わせた例としては、「たらちねはかかれとてしもむばたまの我が黒髪を撫ですやありけん」(和漢朗詠集、下、僧、六一〇番、遍昭)が有名。

〔参考〕『新編国歌大観』の歌肩には「統撰八享祿五卯六宗長法師追善」とあり、『統撰吟集』卷八・三一五六番歌、享祿五年(一五三二)四月六日の詠作。宗長は連歌師で、同年三月六日に八五歳で没。

(村上泰規)

薬王品

689 たとへまであふけは高し法の花に心をふかくそめいろのやま

又、如土山・黒山・小鉄圀山・大鉄圀山、及十宝山、衆山之中、須弥山_ヲ為_レ第一。此法華經_モ亦復如_レ是。

〔出典〕雪玉集、二二五〇番。妙法蓮華經、卷六、薬王菩薩本事品、第二三。

〔異同〕『新編国歌大観』「薬王品―薬王品 衆山之中須弥山為第一」。『妙法蓮華經』ナシ。

〔訳〕 薬王品

その喩えまでも仰げば高く優れている。法華經に心を深く染めると、須弥山は。

また、土山・黒山・小鉄圀山・大鉄圀山、および十宝山などの山々の中で、(宇宙の中心にそびえる)須弥山が最も高いように、この法華經もまた(あらゆる經典の中で)最上位にある。

〔考察〕「葉王品」は葉王菩薩の因縁を説き、諸経の中でも法華経を最上とする。当歌も法華経の素晴らしさを山の高さに喩えて詠む。「法の花」は仏に供える花や仏道の精華を意味するが、ここでは法華の訓読み。下の句は「心を深く染め」と「蘇迷盧」（須弥山の意）を掛ける。

〔参考〕「十宝山」は須弥山を含む十の山の総称。『新編国歌大観』の歌肩には「文明七十二廿九贈内大臣卅三廻」とあり、文明七年（一四七五）十二月二十九日の詠作。「贈内大臣」はその年に三十三回忌を迎えた日野重政（一四四三年没）。

妙音品

（村上泰規）

690 立田姫秋の宮にも言の葉の千入を法のえにし染らん

乃至於_ニ王後宮_ニ変為_ニ女身_ニ而説_ニ是経_ニ。華徳、是妙音菩薩_ハ能救_ニ護_{スル}娑婆世界諸衆生_{ナリ}者_{ナリ}。

〔出典〕雪玉集、二五二一番。妙法蓮華経、卷七、妙音菩薩品、第二四。

〔異同〕『新編国歌大観』『妙法蓮華経』ナシ。

〔訳〕 妙音品

立田姫が山の葉を何度も染めるように、妙音菩薩が法華経を何度も説くことで、後宮も仏法の縁に染まるだろう。

（妙音菩薩は）また、王の後宮においては女性に変身して、この法華経を説いてきた。華徳菩薩よ、この妙音菩薩は、娑婆世界にいるすべての衆生を救済できる者なのだ。

〔考察〕「竜田姫」は奈良の西方にある竜田山の女神。五行思想では西は秋にあたるので、秋の女神となり、草木を紅

葉させる。「秋の宮」は長秋宮の訓読で、中宮・皇后・皇太后、またはその殿舎を意味する。出典は妙音菩薩の神通力を説明した箇所、竜田姫が葉を「千入」(何回もの意)染めるように、妙音菩薩も法華経を何度も後宮で説いた功德を詠む。

普門品

(島田薫)

691おろかなるあまのさかてもやかて身にかへす恨を思ひしらなん

呪詛諸毒藥、所欲害身者、念彼觀音力、還著於本人。

〔出典〕雪玉集、二五二二番。妙法蓮華經、卷第七、觀世音菩薩普門品、第二五。

〔異同〕『新編国歌大観』『妙法蓮華經』ナシ。

〔訳〕 普門品

愚かにも人を呪っても、すぐに(観音の神通力で加害者の)身に返す恨みを思い知ってほしいものだ。

呪や毒藥で殺されそうになっても、ひたすら観音の力にすがれば、かえって呪った本人に害が及ぶ。

〔考察〕「天の逆手」は呪術の一種とされるが、具体的な動作は不明。当歌は出典を踏まえて、人を呪うような恨みは自分に返ってくることに気づいてほしいと詠む。

〔参考〕『新編国歌大観』の歌肩に「後花御十三廻」とあり、文明十四年(一四八二)御花園天皇十三回忌法要の詠作。

(島田薫)

五百弟子品

692 かけ来しをしらぬも心からころもかへせまよひをたまの光に

以_ニ無價宝珠_一繫_レ其_ノ衣裏_ヲ与_レ之_ヲ而_{シテ}去_ル。其_ノ人醉_臥都_テ不_ニ覚知_一云云。

〔出典〕雪玉集、八一〇九番。妙法蓮華經、卷四、五百弟子授記品、第八。

〔異同〕『新編国歌大観』『妙法蓮華經』ナシ。

〔訳〕 五百弟子品

（宝珠を衣の裏に）掛けてきていたことを知らないのも、（自分の迷いの）心のせいだ。衣を裏返すように、心の底から迷いを返しなさい、宝珠の光に。

（男の友人は）値も付けられないほど貴重な宝石を、その男の衣類の裏に縫い付け、それを与えて（何も言わずに）立ち去った。その男は酔って寝ていたので、全く気づかなかった云々。

〔考察〕 出典は「衣裏繫珠」（衣珠のたとえ）。目覚めた貧者は宝珠に気がつかないまま帰り、貧しい生活を送っていたが、たまたま親友に再会して宝珠を知る、と続く。「衣の珠」は人に本来備わっている仏性を意味し、誰もが仏の教えにより成仏できると説く。当歌は「心からころも」に「心から」と「唐衣」（衣の美称）を掛け、「かへせ」（「返す」の命令形）に衣を裏返すと迷いを宝珠の光に返す（悟りを開くこと）を重ね、仏の教えにより心の迷いを消し去るようにと詠む。

〔参考〕「今ぞ知る衣の裏にかけまくも妙なる法の玉の光を」（為世十三回忌和歌、一五番、詠五百弟子品和歌、経顯）。

(島田薫)

常不輕品

693 ちりの身とおもふにすてんかろからぬことはりをしる人も有世に

正法住世劫数、如一閻浮提微塵。像法住也劫数、如四天下微塵云云。我深敬_レ汝等_ヲ、不_レ敢_テ輕慢_ト。

〔出典〕雪玉集、八一〇番。妙法蓮華經、卷六、常不輕菩薩品、第二〇。

〔異同〕『新編国歌大観』「常不輕品―常不輕菩薩品」。『妙法蓮華經』「住也―住世」。

〔訳〕 常不輕品

塵のように軽くてはかない身だと思つと、出家してしまおう。他人を軽蔑しない教えを守る人もいる世ではあるが。

(正しい教えと正しい実践と正しい結果がある) 正法の世の長さは、一閻浮提(私たちが現在いる南瞻部州という世界)を構成している原子の数に等しい。(正しい教えと正しい実践のある) 像法の世の長さは、四天下(東勝身州・南瞻部州・西牛貨州・北俱盧州からなる四大州)を構成する原子の数に等しい云々。私はあなたたちを深く敬い、決して軽蔑しない。

〔考察〕 出典本文の「微塵」は、仏教では非常に小さいものを表わす単位。「常不輕」は「常不輕菩薩品」に登場する菩薩の名で、すべての人の成仏を信じて敬い輕慢せず、会う人ごとにうやうやしく礼拝したという。当歌はそれを踏まえて、常不輕菩薩のような決して他人を輕んじない人もいる世ではあるが、我が身の儂さを嘆く心を詠む。

(松田望)

観無量寿経

694世の霜にあは、ためしもなき名のみ杜の柞のおしくやはあらぬ

観無量寿経ニ阿闍世太子執剣欲害其母韋提希夫人。月光・耆婆二臣云、「劫初已来有諸惡王。未嘗聞有無道害母」云云。此経、為之發起也。猶繙本経「可閱之」。

〔出典〕雪玉集、五四五〇番。観無量寿経。〔異同〕『新編国歌大観』「世―あき」。

〔訳〕 観無量寿経

霜にあたると森の柏などは（枯れて）惜しいが、母が白髪になると前例もない、身に覚えもない噂ばかりで、（子は）母親（の命）が惜しくないのだろうか。

観無量寿経によると、阿闍世太子は剣を手に執り、彼の母である韋提希夫人を殺そうとした。月光と耆婆の二人の臣下が言うには、「この世の初めよりこのかた、さまざまな悪王がいる。いまだかつて、母を殺す非道な行いをする者がいると聞いたことがない」云々。この観無量寿経は母の願いのために（仏が説いて）生まれたのである。さらに、この経を紐解いて、そのことを見るがよい。

〔考察〕当歌は「霜」に白髪、「ためしもなき名」に「ためしもなき」と「なき名」（身に覚えのない評判）、「柞」（櫟や柏などの総称）に「母」を掛ける。

〔参考〕出典は『観無量寿経』のあらずじなので、「異同」には取り上げない。その個所に相当する『観無量寿経』の本文は以下の通り。「即執利剣欲害其母。時有一臣名曰月光。聰明多智。及与耆婆為王作礼、白言大王、『臣聞毘陀論経説』。劫初已来有諸惡王貪国位故、殺害其父一万八千。未嘗聞有無道害母」。韋

提希夫人は古代インドの摩揭陀国王である頻婆娑羅の後である。『観無量寿経』によると、阿闍世は彼の悪友である提婆達多にそそのかされ、父の国王(頻婆娑羅)をとらえて幽閉した。韋提希夫人は水浴して身を清め、バターに乾飯の粉末をまぜ合わせたものをその身に塗り、胸飾の中に葡萄酒を入れ、ひそかに王に与えたので、王は命を繋いだ。三週間が過ぎて王が生きていることを不審に思った阿闍世は、門番に理由を尋ねて母の行為を知り、母を殺そうとしたが、二人の臣下が阿闍世の親不孝を諫めた。そこで阿闍世は深く懺悔し、母を宮殿の奥深くに幽閉した。韋提希は愁い悲しみ、耆闍崛山に向かつて礼拝し仏の来臨を請うたところ、仏は王宮内に出現し、韋提希の願いにより西方極楽浄土を示現して往生の方法を説いた。

(松田望)

阿弥陀経

695 うれしくもむすふ契そいつはりのあらしとなくときしした紐

無量寿経云、無_レ有_二虚_一偽_レ諂_レ曲_一之心云云。按、阿弥陀_ハ梵語、翻_二訳_一無量寿_一也。

〔出典〕雪玉集、五四五一番。仏説無量寿経、卷上。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『仏説無量寿経』「諂曲―諂曲」。

〔訳〕 阿弥陀経

うれしいことにあの人と契りを結び偽りはないだろうと思ひ、長い間、下紐を解いていたが、「(極楽浄土には)偽りはない」と長い間説教されたおかげで、ありがたいことに仏と宿縁を結んだことだなあ。

無量寿経によると、(極楽浄土には)うそをついたり、こびへつらったりする心は存在しない云々。考えてみ

ると、阿弥陀とは梵語で、無量寿（無限の寿命を持つもの）を翻訳したものである。

〔考察〕『仏説無量寿経』は浄土三部経の一つで、阿弥陀如来が築いた極楽浄土に欲想や欲覺等が存在しない様を説く部分。当歌は、極楽浄土には偽りの心が存在しないことを踏まえ、結んだ宿縁を頼りに思つ心を詠む。「とき」は「説き」と「解き」の掛詞。恋歌では、下紐は人に恋されると解けるとされた。当歌は『雪玉集』の「詠法文五十首和歌」の一首であり、末尾に「此法文和歌 後土御門院三十三回前四十八日勤行之間、連連綴連之（下略）」と記されていることを踏まえると、読経の際などに故人の装束を布施として寺に寄進する風習との関連が考えられる。

〔参考〕「かの人の四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、事そがず、装束よりはじめてさるべき物どもこまかに、誦経などせさせたまふ。（中略）忍びて調せさせたまへりける装束の袴をとり寄せさせたまひて、

泣く泣くも今日わが結ふ下紐をいづれの世にかとけて見るべし」（源氏物語、夕顔の巻、一九二頁。光源氏は密かに夕顔の四十九日を行い、お布施に装束を用意して哀傷歌を詠む。）

（森あかね）

大日

696 たくひやは世にあらかねのあららきをとちて久しき法のあるしは

秘密念仏鈔三五方五如来、東阿闍木青、西弥陀金白、南宝生火赤、中央大日土黄、北釈迦水黒云云。

〔出典〕雪玉集、四〇五〇番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 大日如来

同類がこの世にいるだろうか。鉄製の仏塔を閉じて久しいが、永久不滅の仏法の主は。

秘密念仏鈔には五方に置かれる五如来が記され、東方は阿闍如来あしやくで木青、西方は阿弥陀如来で金白、南方は宝生如来で火赤、中央は大日如来で土黄、北方は釈迦如来で水黒である云々。

〔考察〕当歌は、鉄を意味する「あらかね」の「あら」に「有ら」を掛ける。「あたらぎ」は仏塔の忌詞。「とちて久しき法」に「とちて久しき」と「久しき法」を重ねる。「あらかねのあらぎ」(鉄塔)は南天竺三にあり、大日如来が説法したとされる。貞和三年(一三四七)に成立した『釈教三十六人歌合』の序には、「大日世尊鉄塔のとほそを開き給ひて、真の法の光をかかやかし」とある。

〔参考〕鎌倉時代前期に道範が著わした『秘密念仏鈔』全三巻は、真言密教の立場から弥陀浄土教の諸概念を解釈し、顕教浄土系の所説を批判したもの。注釈本文は五体の如来に、真言密教における五色(青白赤黄黒)と五行(木金火土水)を対応させているが、その一節は『秘密念仏鈔』には見当たらない。

(橋谷真広)

阿弥陀

697 深かりしちかひのま、の名取川ひかれてうかむ瀬々の埋木

無量寿経曰、如来知恵海、深広ニシテ無涯底ニ。聞レテ名ヲ欲スレハ往生セント、皆悉到ニ彼ノ国ニ。
〔出典〕雪玉集、四〇五二番。仏説無量寿経、卷下。

〔異同〕『新編国歌大観』「ひかれてうかむ―ひかれてうかぶ」「瀬々の埋木―世世のむもれ木」。『仏説無量寿経』「知恵海―智慧海」。

〔訳〕 阿弥陀仏

名取川の多くの浅瀬に埋もれ木が浮かぶように、阿弥陀仏が立てた深い誓願にまかせ、仏の名に引かれて浮かばれよう。

無量寿経によると、如来の知恵の海は深く広くて、果ても底もない。仏の名を聞いて往生したいと思えば、皆すべてがかの国（極楽浄土）へ行ける。

〔考察〕「名取川」と「瀬々の埋もれ木」は、「名取川瀬々の埋もれ木あらはればいかにせむとかあひ見そめけむ」（古今和歌集、恋三、六五〇番）のように併用されることが多い。「埋もれ木」とは水中に長い間、埋まっていたため炭化して黒く固くなった木を指し、転じて世間から忘れられた存在に例える。名取川の「名」に『仏説無量寿経』の「聞名」の「名」を響かす。当歌の第四句「浮かむ」に、埋もれ木が浮くと成仏するを掛ける。

〔参考〕出典の本文で、「如来知恵海、深広無涯底」と「聞名欲往生、皆悉到彼国」は『仏説無量寿経』では別々の箇所にあるが、組み合わせることで人智を超えた阿弥陀仏の計らいに全て委ねることを強調したと解せられる。親鸞の著作である『教行信証』にも、「弥陀智願海。深広無涯底。聞名欲往生。皆悉到彼国。」とある。

（嶋中佳輝）

弥勒

698 おろかにそ名をもとめけるおこたりに世に出る道やしはしをくれし

弥勒所問経云、阿難白レ仏言ク、「弥勒得_二法忍_一、久遠_{ニシテ}乃_チ爾_リ。何以_不逮_ニ上_ニ正真之道_一。成_中最正覚_上耶」。仏語_ニ阿難_一、「菩薩四事法不_レ取_ニ正覚_一。何等_為レ四。一_ニ淨_ニ国土_一。二_ニ護_ニ国土_一。三_ニ淨_ニ一切_一。四_ニ護_ニ一

切一。是為三事一。彌勒本ト求シレシ仏時亦有此四一。然ルニ彌勒發スル意ヲ先ツ我カ之前ニ四十二劫ナリ。我於ニ其後ニ乃チ發ス道意ヲ。於ニ此ノ賢劫ニ以大精進超越ニ九劫ニ得無上正真之道ニ致ニ最正覺ニ云云。

彌勒出世從ニ積尊入滅ニ隔ニ五十七俱低六十百千歲ニ云云。見于往生要集。

〔出典〕雪玉集、四〇五四番。法苑珠林、卷一六。往生要集、上之末。

〔異同〕『新編国歌大観』「おろかにそ—おろかにも」。『法苑珠林』「何以不逮—何以不速逮」「彌勒本求仏時亦有此四—彌勒本求仏時以是四事故不取仏語阿難我本求仏時亦有此四」「得無上正真之道—得於無上正真之道」。『往生要集』「彌勒出世—ナシ」「隔—至慈尊出世隔」。

〔訳〕 彌勒菩薩

(彌勒は) おろかにも(四つの本願を達成する) 名声を求めたのだなあ。(修行を) 怠ったため(衆生を救いに) この世に現われるのが(釈迦よりも) しばらく遅れたのだろうか。

彌勒所問經によると、阿難が釈迦に申して言うには、「彌勒菩薩が法忍(仏法の真理)を悟ったのは、意外なことに久遠(遙か以前)であった。どうして無上正真道(この上ない正しい真実の道)に【速やかに】到達したのに、最正覺(最も正しい悟り)を達成しなかったのか」。釈迦が阿難に語るには、「彌勒菩薩は(彌勒菩薩の本願である)四事の決まりを立てて、正覺(究極の悟り)を選択しなかったのだ。何を四事とするかという

と、一にこの世を清めること、二にこの世を守ること、三にあらゆるものを清めること、四に一切衆生を保護すること、これが四事である。彌勒はもともと(究極の悟りに達して)仏になろうとしたとき、【この四つの本願を成就することを選び、仏になることを選ばなかったのだ】。釈迦が阿難に語るには、「私がもともと仏

になろうとしたときも、【この四つの本願を成就することを選んだ。しかしながら弥勒の発願は、私（釈迦）よりも四十二劫も早く、私はその後によっと発願して、この賢劫（今の世の中）において大いに精進して九劫もの時間を超越し、無上正真道に到達して最正覚を達成した】云々。

「弥勒が（衆生を救いに）この世に出現するのは、釈迦が入滅してから五十七億六千万年を隔てる云々」と、往生要集に見える。

〔考察〕 弥勒は釈迦の次に成仏することが決まっていた菩薩。五十七億六千万年（一説には五十六億七千万年）後にこの世界に現われて衆生を救うとされ、それを「弥勒出世」という。「俱低」は計り知れない数をさす言葉で「億」と訳す。弥勒は釈迦よりも発願は早かったが、衆生の救済は遅れたことを当歌は歌う。

〔参考〕「弥勒所問経」は『弥勒菩薩所問本願経』かと考えられるが、引用本文とは異同が多いので、出典は『法苑珠林』からの孫引きと見て、抜けている箇所も訳して【】で括った。文中の「乃爾」は「こんなにも」と訳し、意外性を表わす。『弥勒菩薩所問本願経』は、弥勒菩薩が今なお菩薩の位にとどまっているのは、衆生済度のためであると説く。

（溝口利奈）

夏釈教 薬師

699 かけ清さるりを光の国のうちはさこそ月日も涼しかるらめ

〔出典〕 雪玉集、四二五一番。

〔異同〕 『新編国歌大観』「夏釈教 薬師―釈教 尺迦薬師地藏観音」「かけ清さ―かけさひろいよき」。

〔訳〕 夏の釈教歌 薬師如来

光の清らかな薬師瑠璃光如来がいる（東方浄瑠璃の）光に満ちた世界の中では、さぞかし月光菩薩も日光菩薩も清々しいであらう。

〔考察〕 薬師瑠璃光如来は東方浄瑠璃世界の教主で、日光菩薩と月光菩薩を脇士とする。当歌は東方浄瑠璃世界の様子、涼夏の趣に重ねて詠む。

（丹羽雄一）

薬師

700 秋さりのしほれし草も春のくるそなたの風にめくむ色かな

薬師本願経曰、仏告_ニ曼殊師利_一、「東方、去_レ此過_ニ十殞伽沙等_一仏土_ニ有_ニ世界_一、名_ニ浄琉璃_一。仏_ヲ号_ニ薬師琉璃光如来_一云云。

涅槃経、高貴徳王品云、復有_ニ光明_一来照_ス。衆不_レ知_レ处。仏勅_ニ文殊_一為_メ説_シム。乃云、「東方満_ル仏光_ニ所_ニ有_ニ菩薩_一、名_ニ琉璃光_一云云。

〔出典〕 雪玉集、四〇五三番。薬師瑠璃光如来本願功德経。

〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。『薬師瑠璃光如来本願功德経』「曼殊師利―曼殊室利」「名浄琉璃―名浄瑠璃」。

〔訳〕 薬師如来

秋霧に萎れた草も、春が来る東からの風に（吹かれると）芽ぐむ気配があるように、病で苦しんだ人も東方の薬師瑠璃光如来が恩恵をもたらすことだなあ。

薬師本願経によると、仏が曼殊師利に告げるには、「ここから無数の仏国土を過ぎた東方に、淨瑠璃という世界がある。仏を薬師瑠璃光如来という」云々。

涅槃経の高貴徳王品によると、再び光明が輝いた。大衆は（光の由来が）わからない。仏が文殊に（光明の由来を）説明させるには、「東方の満月光明仏のところに菩薩がおり、名前を瑠璃光菩薩という」云々。

〔考察〕『薬師瑠璃光如来本願功德経』は薬師瑠璃光如来の淨土、薬師瑠璃光如来の名を唱えることで得られる功德、經典や仏像の供養などを説く。「殞伽^{じゆうが}」はガンジス河、「沙^{しゃ}」は砂の意で、「十殞伽沙」は無数をガンジス河の砂の数にたとえる。当歌は結句の「めぐむ」に「芽ぐむ」と「恵む」を掛け、薬師瑠璃光如来の恩恵を春の萌芽に重ねて詠む。「秋霧の萎れし草」は病人の比喩。五行説では春は東から来る。

〔参考〕『薬師瑠璃光如来本願功德経』は元禄一六年（一七〇三）跋の版本を使用。「高貴徳王品」は正式名称を「光明遍照高貴徳王菩薩品」と言い、一三章から成る『大般涅槃経』の一章。涅槃経を修行することで得られる十徳を説く。現存本『大般涅槃経』には「復有光明来照」以下の本文は見当たらず、『三玉挑事抄』所引は梗概かと推定される。『大般涅槃経』については70番歌の「参考」を参照。

（丹羽雄一）

秋釈教 地藏

70露の身のうきを尋ぬと朝毎にいく里かけて君は行らむ

延命地藏経曰、毎日晨朝ニ入^ニ於諸定^一、遊^ニ化六道^ニ拔苦与^レ楽^一。

地藏十輪経曰、此善男子於^ニ一^ノ日毎^ニ晨朝^ノ時^一、為^レ欲^{スル}成^{セント}諸有情^ヲ故、入^ニ殞河沙等^ノ諸定^一。従^レ定

起已テ、遍ク於テ十方諸仏ノ国土ニ成テ、熨ス一切所化ノ有情ヲ。

〔出典〕雪玉集、四二五二番。延命地藏經。大乘大集地藏十輪經、序品第一。

〔異同〕『新編国歌大観』「秋釈教 地藏―釈教 尺迦葉師地藏觀音」。『延命地藏經』『大乘大集地藏十輪經』ナシ。

〔訳〕 秋の釈教歌 地藏菩薩

露のようにはかなくつらい身の上の人々を探し求め(救済し)ようと、毎朝どれだけの地を目指して、あなた(地藏)は行くのだろうか。

延命地藏經によると、(地藏は)毎日早朝の勤行において、諸々の瞑想に入る。六道に赴き人々を教化して、苦を取り除き樂を与える。

地藏十輪經によると、この信仰心ある善人(地藏)は毎朝の勤行において、さまざまなきとし生けるものを悟りの境地に至らせようとするために、恒河沙(ガンジス河の砂)ほど無数の瞑想に入る。瞑想を終え、あらゆる仏世界において、一切の導かれるべき生きとし生けるものを悟りの境地に至らせる。

〔考察〕『延命地藏經』は唐の玄奘による『十輪經』の異訳で、地藏菩薩が沙門の姿をとり衆生を救うことを説く。『大乘大集地藏十輪經』は唐の玄奘による『十輪經』の異訳で、地藏菩薩が沙門の姿をとり衆生を救うことを説く。どちらも地藏信仰に基づいたものであり、江戸時代初期に亮汰が著わした『延命地藏經』の注釈書『延命地藏經鈔』には、「毎日晨朝入於諸定遊化六道拔苦与樂」の解説として『地藏十輪經』の当該箇所が引かれているので、『三玉挑事抄』はその引用かもしれない。「定」は雑念を絶ち無念無想の境地に入ること。「晨朝時」の「時」は仏道の勤行の時刻、またその勤行。「成熟」は機が十分熟すること、転じて悟りの機が実ること。「有情」は心を備えている

生き物で、鳥獸なども含む。「所化」^{しよけ}は教えを受ける者。当歌は地藏菩薩による衆生の救済を、經典の内容を踏まえて詠む。

〔参考〕『十輪經』には、「於晨朝時。入恒河沙世界三昧。為成熟衆生故。從禪定起。令無量無辺諸仏世界於五濁惡世成就衆生悉空無余。」とある。『延命地藏經』は『真言宗聖典』（小林正盛編、森江書店、大正一五年）、『延命地藏經鈔』は『日本大藏經』4（日本大藏經編纂会、大正四年）を使用。

（八木智生）

冬釈教 観音

702ちかひあれはかれにし木もや立かへり花咲春をしるて待らん

新統古今集云、梅の木のかれたる枝に鳥のゐて花さけくとなくそわりなき

これはまつしき女の清水に百日まふて、なくく祈ける夜の夢に観音のよませ給ひける歌となむ云々。

〔出典〕雪玉集、四二五三番。新統古今和歌集、卷八、釈教歌、八一六番。

〔異同〕『新編国歌大観』「待らん―またまし」。『新統古今和歌集』「給ひける―給うける」。

〔訳〕 冬の釈教歌 観世音菩薩

（花を咲かせようという観音の）誓いがあるので、枯れてしまった木も昔に返り、花が咲く春（になること）を一途に待っているのだろうか。

新統古今和歌集によると、梅の木の枯れた枝に鳥が止まって、「花よ、咲け咲け」と鳴くのは無理なことである（ように、貧しい女が泣きながら富貴になることを願っても無理なことである）。

これは貧しい女が清水寺に百日間、参詣して、泣きながら(富貴になることを)祈った夜の夢の中で観音がお詠みになった歌と(言われている)云々。

〔考察〕『新続古今和歌集』の和歌は、鳴く鶯を泣きながら祈願する女になぞらえ、願いが叶いたいことを教え諭す観音の託宣歌で、同じ歌が平安末期に編纂された『続詞花和歌集』『袋草紙』『宝物集』にも採られている。「枯れたる枝」は貧しさ、「花咲け」は富貴を表わす。

〔参考〕清水寺は現在の京都市東山区にあり、音羽山を背にした地にある法相宗の古刹。本尊は十一面観音で、観音信仰の聖地として栄えた。観音菩薩の功德靈験を説く説話は、平安初期に成立した『日本霊異記』にも見られ、貧しい人が富貴になる、幸せな結婚をするなどの現世利益譚が多い。

(湯本美紀)

最勝講

703 あまくたる跡しき忍へ雲の上にも五日の法のむしろは

江次第、頭書曰、最勝講、寛弘六年以来被_レ行也。此前或_ハ行、或_ハ止不定也。後朱雀院御時、四天王化現。故_ニ

御帳ノ四角ニ儲_ニ四天ノ座_ヲ云云。講、五箇日、兼_ニ日有_ニ日時僧名ノ定等_一。

〔出典〕雪玉集、三三〇七番。江家次第、卷第七、五月、最勝講。

〔異同〕『新編国歌大観』『江家次第』ナシ。

〔訳〕 最勝講

天上から降下する仏法をひたすら敬いなさい。宮中では今も五日間の法会は(行われている)。

江次第の頭注によると、最勝講は寛弘六年（一〇〇九）以来行われている。それ以前は行われたり行われなかつたりと、定まっていなかった。御朱雀院の御代（一〇三六〜四五）に、四天王（仏法を守護する持国天、增長天、広目天、多聞天）が世に現れた。そのため、御帳の四隅に四天の座を設けた云々。最勝講は五日間に亘つて行われ、あらかじめ日時や招請される僧侶の名前を定めることなどがある。

〔考察〕最勝講は毎年陰曆五月の吉日を選び、五日間行われた金光明最勝王経の講会。一条天皇の長保四年（一〇〇二）に行われた講説が始まりとされる。宮中の清涼殿では天下泰平国家安穩を祈願し、東大寺・興福寺・延暦寺・園城寺の高僧を選び、『金光明最勝王経』一〇巻を朝夕二回に分けて一卷ずつ講じさせた。当歌は、宮中の清涼殿で行われる最勝講によつてもたらされる功德を歌う。第二句の「しきしのぶ」はしきりに慕う、という意味。

〔参考〕『金光明最勝王経』は護国三部経の一つ。四世紀頃に成立したとみられる『金光明経』を、唐の義浄が漢訳した。日本には八世紀頃に伝わったとされる。この経を広め、国王が正法をもつて国を治めることで国は豊かになり、四天王を始めとする諸天によつて国が守護される。

（橋谷真広）

飲酒戒

704盃のみきともいふな伝へける手たにむなしき世々をおもは、

梵網經心地法門品曰、若自身手ニ過シ酒器ヲ、与レ人飲レ酒者、五百世無レ手。何況自飲_レヲヤ。不_レ得_レ教_二一切人飲

及一切衆生_ヲ飲_レ酒。況自飲_レ酒_ニヤ。

〔出典〕雪玉集、二四九六番。梵網經盧舍那仏説菩薩心地戒品、第一〇卷下。

〔異同〕『新編国歌大観』『梵網經盧舎那仏説菩薩心地戒品』ナシ。

〔訳〕 飲酒戒

盃を見たとも、(酒を敬つて) 御酒^{みき}とも言つてはいけない。(先祖から) 伝えられた手さえ無くなる後世^{こうせい}を思えば。

梵網經心地法門品によると、もし自分自身の手で酒器を手渡し、人に酒を飲ませたならば、(飲ませた者はその報いにより) 五百世にわたり手が無い(ものとして生まれ変わる)。まして自分から(酒を) 飲むことは言うまでもない。いかなる人も飲むこと、及びあらゆる衆生に酒を飲ませることを教えてはならない。まして自分から飲酒をするのは、もつてのほかである。

〔考察〕『梵網經』全二巻は、鳩摩羅什が漢訳したと伝えられる大乘仏教の經典で、上巻は菩薩の階位(四十種の法門)を説き、下巻は菩薩戒(大乘仏教における戒律)として十の重戒(酒を販売など)と四十八の輕戒(飲酒など)を説く。当歌は第二句の「みき」に「見き」と「御酒^{みき}」を掛け、禁酒の戒律を破つた際の報いと戒めを歌う。

〔参考〕雪玉集の歌肩に「永正三八御月次」とあり、永正三年(一五〇六)八月の月次歌。

(橋谷真広)

修羅

705はかなしや名高き雪ののり物も法の道にしうときあそひは

雪ののり物、いまたかうかへ待らす。

按、首楞嚴經卷九ニ説キ四種ノ修羅ヲ已^{ツテ}云ク、「別有二分下劣ノ修羅。生^ス大海心^ノ。沈^ム水穴^ノ口^ニ。且^タ遊^ビ虚空^ニ、暮^ニ帰^リ永宿^ニ」云云。

もし此経文の心にも待らは、雲ののり物なるへき歟。猶、証本を尋ね侍るへし。

〔出典〕雪玉集、二四九八番。大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴経、卷第九。

〔異同〕『新編国歌大観』「うときあそひは―とほきあそびは」。『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴経』ナシ。

〔訳〕 阿修羅

はかないことだなあ。名高い雪の乗り物も、仏法の道に遠い遊びでは。

「雪の乗り物」は、まだ分かっていません。

思案するに、首楞嚴経の卷九に、四種類の修羅について説き終わって言うには、「(四種類とは)別に、一部の卑しい修羅がいる。大海の深い所に生まれ、水中の洞窟に潜む。昼間は虚空に遊び、日暮れには水中の洞窟に帰って宿る」云々。

もしこの経文の内容でありますならば、「雲の乗り物」であろうか。さらに証拠となる文献を探さないといけません。

〔考察〕『首楞嚴経』は『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴経』のことで、禅法の要義を説く、唐代の偽経。

「修羅」は阿修羅の略で、仏法における悪神を指す。「雲の乗り物」も「雪の乗り物」も用例は確認できないが、「雪の乗り物」は箱櫃(はこび)(箱をのせた櫃)か。また、大石や大木などを運ぶ木櫃(きび)を修羅車(しゆらくるま)という。これは修羅が帝釈(たいしゃく)と争って勝ったことから、大石(たいしゃく)を動かす車を修羅車、略して修羅と呼ぶ。和歌では「乗り物」の「乗り」が「法」

を導く。

(嶋中佳輝)

香薫十方

706 二葉より匂ふ林に立ぬる、袖もかくこそよものはるかせ

観仏三昧経。出于春部花歌註。

〔出典〕雪玉集、五四三三番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 香が十方世界に薫る

二葉のときから香気が漂う林に立っていると、濡れた袖もこのように四方から吹く春風(で乾くこと) だなあ。

観仏三昧経。春部、花の歌の注に掲出した。(54番歌、参照)

〔考察〕 54番歌の出典は、香りの良い梅檀の木が悪臭を放つ伊蘭の林に混じってもその芳香を失わず、最終的に林そのものを踏まえ、香気が漂う林の中で心地よい春風に包まれ清々しくなっていくさまを詠む。

〔参考〕『観仏三昧経』は『観仏三昧海経』の略称。東晋の仏陀跋陀羅の訳で、広く観仏念仏の功德を説く。

(嶋中佳輝)

題しらす

707 らにきくの花にはあやなよりきつときけは狐の心さへうし

白氏文集。凶宅ノ詩ニ、梟鳴ニ松桂ノ枝ニ、狐蔵ニ蘭菊ノ藂ニ。

〔出典〕雪玉集、五六一八番。白氏文集(白楽天全詩集)、卷一、諷諭、凶宅。

〔異同〕『新編国歌大観』「題しらす―ナシ」「花には―花かは」。『白氏文集』「藂―叢」。

〔訳〕 題知らず

蘭や菊の花は訳が分からない。(狐が蘭や菊に) 近寄って来ると聞くと、狐の心までもが厭わしい。

白氏文集。凶宅の詩に、梟は(庭の)松や桂の枝に鳴き、狐は蘭や菊の草むらに隠れる。

〔考察〕「凶宅」の詩は、権勢に驕る者には禍が必ずその身に及ぶことを歌ったもので、引用箇所はかつての権力者の豪邸が今では荒廃して、高級な花である蘭や菊に狐が棲みついたさまを詠む。当歌は蘭や菊を擬人化して、狐を引き寄せるとは「あやな」「あやなし」の語幹と見なす。第三句「寄り来つ」の「来つ」に「きつ」(狐の古名)を響かす。源氏物語の次の一節も「凶宅」詩を踏まえる。「もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処すになりて、疎うとましうけ遠き木立こだちに、梟ふらふの声を朝夕に耳馴らしつつ」(蓬生、三二七頁)。

〔参考〕当歌を含む『雪玉集』の三十一首(五五九二～五六二番歌)には左注がある。「右、以挽歌一首之卅一字、置初句之首、卒綴卑詞、述哀慟之罔極云。大永五年(一一五二五)十月廿九日 桑門遣遥子七十二歳」。すなわち当歌は、道永の詠んだ挽歌「思ひには死なれぬとなど嘆きけむうきためにとてながらふる身を」(雪玉集、五五九一番)の三十一文字をそれぞれ歌頭に置いた、実隆の連作。

(溝口利奈)

